

被爆80周年、第31回ヒロシマ市民の描いた

原爆

絵画展報告集

2025年8月18日(土)～24日(日)

坂戸市入西地域交流センター



主催：原爆絵画展坂戸・鶴ヶ島地区実行委員会

後援： 広島市、長崎市、埼玉県・坂戸市・鶴ヶ島市及び各教育委員会

丸木美術館、埼玉新聞社、テレ玉、FM NACK5、

NHK さいたま放送局、朝日新聞社さいたま総局、

毎日新聞さいたま支局、東京新聞さいたま支局、琉球新報社

被爆 80 周年、第 31 回ヒロシマ市民の描いた原爆絵画展

概要

開催日時 2025年8月18日(月)11時 ～ 8月25日(日)17時

開催場所 坂戸市入西地域交流センター ギャラリー 多目的室

入場者数 7日間で延べ819人

特別企画 「万死に一生 被爆体験談」
しらさぎ会(埼玉県被爆者協議会) 三松保則さん

展示品

- * ヒロシマ市民の描いた原爆絵画
- * 『ヒロシマを語り継ぐ』パネル
- * 第五福竜丸の模型と資料(右写真)
- * 広島原爆で溶けた瓦(原爆瓦)
- * ヒロシマ新聞 発行できなかった1945年8月7日の新聞を
1995年に中国新聞労働組合が作成したもの
- * 広島の高校生が描いた原爆絵画
- * 丸木位里・俊 作 『原爆の図』複製パネル
- * 市内小中学校の『被爆アオギリ2世』写真等
- * 原爆関係図書、資料の展示
- * 原発事故関係資料



※表紙写真は市内小中学校の「被爆アオギリ2世」の
生育状況。アオギリ植樹の取組については、この
報告集中ほどの★のページをご覧ください。



続けること、そして引き継ぐこと

実行委員長 武 井 誠

第31回「ヒロシマ市民の描いた原爆絵画展」が無事、終了しました。1993年に始まった原爆絵画展は、「コロナ禍」による2020、21年の2年間を除いて、毎年開催されてきました。このたび、川崎正司さん(第1～11回)、白石俊夫さん(第12～28回)、武井真澄さん(第29、30回)のあとを引き継いで委員長になりました武井誠です。どうぞ、よろしくお願いします。

実行委員会で議論し、今年度は大きく企画を変更・追加しました。①会場を北坂戸の文化施設オルモから入西地域交流センターに移動、②開催期間、時間を大きく延長、③中・高生に準備、片づけ、受付などのボランティアを依頼、④小学生のために「昭和の遊び」ワークショップを開催、⑤特別企画の中で平和ミニコンサートを実施、⑥1954年に水爆実験の被害を受けた第五福竜丸の模型展示、⑦被爆者と協力して広島の高校生が制作した絵画の展示、などです。

例年の3倍以上の方にご来場いただくことができました。また、アンケート集計結果や実行委員みなさんのコメントなどから、それぞれの企画も好評であったことがうかがわれます。ボランティア派遣にご協力頂いた若宮中学校、筑波大附属坂戸高校、地域へのチラシ回覧・公営掲示板へのポスター掲示などを快諾してくださった入西区長会ほか、ご協力いただいたすべてのみなさまに心より感謝いたします。本当にありがとうございました。

私事ですが、今年度の絵画展を準備する中で、とても嬉しかったことがありました。協力をお願いに若宮中学校を訪問した時のことです。K校長は、全校生徒へのチラシ配布や校内へのポスター掲示だけでなく、若中生へのボランティア募集についても快諾してくださいました。心からの謝意を表し、玄関まで送っていただいたとき、小走りで40歳くらいの女性教員が私のところへ。「武井さん、お会いしたかったです。S.O.です。」1999年に埼玉原水禁の取り組む「ヒロシマに学ぶ埼玉子ども代表団」の一員として、私と広島を旅した中学生(当時)でした。子ども代表団は例年8月6日の夕方、「灯籠流し」の前に、平和公園の一角に車座になってすわって「まとめの会」をします。私からの「原爆を二度と落とさせないためにはどうしたらいいと思いますか？」という投げかけにS.O.さんは「世界に友だちをたくさん作りたい。友だちの頭上にはこんな残

酷な爆弾は落とせない」と発言。それは25年以上たった今も、私の心に深く記憶されていました。そのことを話すと隣でK校長が「ああ、それで今、英語の先生なのですね」と。S.O.さんも「進路選択など、いろいろ悩んだ時に、広島に行って武井さんと学んだことを思い出していました」と。大げさでなく、生きてきてよかったと感じた瞬間でした。S.O.さんは、その翌年に同じく子ども代表団として参加された妹さん(小学校教員)と共に、今回の絵画展特別企画にも参加、私から会場のみなさんにこのことを紹介させていただきました。

会場の展示物について、初めに私たちのレクチャーを受けたボランティアの中・高校生が、活動の後半には、今度は小学生の来場者に、一生懸命説明・案内をする姿に感動しました。それは、被爆者の方々が語る過酷な体験を受けとめ、共有し、懸命に絵画の制作にとりくんだ広島の高校生に通じるものがあります。ボランティア体験を踏まえて、来年度の実行委員になってくれた高校生もいます。継続とバトンタッチが私たちに託された重い課題です。

6歳の時に爆心地から1キロのところで被爆された「語り部」、三松保則さん(被団協)のお話は、今年も聴く人の心に刺さりました。9月11日の東京新聞には三松さんが会長を務める県原爆被害者協議会(しらさぎ会)が、県内の全市町村議会に対し、被爆者の声を聴く証言会を議場で開くように呼びかける記事が掲載されていました。ぜひ、この地区の議会でも取り組んでいただきたいと思います。



戦争や核兵器については様々な議論があります。しかし、どんな議論、主張をするにしても、それは「もし戦争が始まったらどういうことが起こるのか」「核兵器が使われたらどうなるのか」という史実・事実を踏まえたものでなければならぬと、改めて肝に銘じなければならぬと感じています。

私たちは原爆絵画展を来年度以降も継続していきます。

あなたも、実行委員に加わりませんか？



中学生・高校生のボランティアと会場設営
若者がいてくれると熱気が違います



小学生に絵画の説明をするボランティア
とても熱心に聴いてくれました



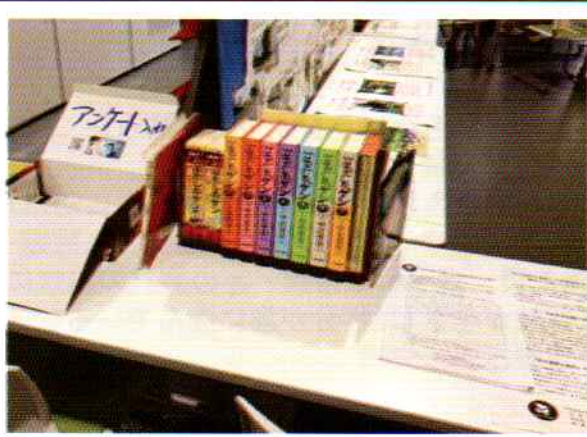
小学生と「昭和の遊び」ワークショップ
下準備には中高生ボランティアが活躍



被爆者の方の証言を受け止め、共同作業で
広島の高校生が描いた原爆絵画



毛呂山のケーブルテレビの取材
絵画に見入っているのは高校生ボランティア



マンガ「はだしのゲン」と坂戸市の取り組む
「核兵器禁止条約」締結を求める署名用紙

～未来につなぐ被爆の記憶～

～万死に一生～ 被爆体験談

主催：原爆絵画展 坂戸・鶴ヶ島地区実行委員会

場所：坂戸市 入西地域交流センター多目的室
令和7年8月24日（日）

講演者：しらさぎ会（埼玉県被爆者協議会）
三松保則

講話者紹介

- ・三松保則 昭和13年12月15日生（戸籍上は14年1月1日）
- ・昭和20（1945）年4月に東京から広島へ疎開
8月6日広島で爆心地から1kmで被爆、当時6歳
- ・9月末に東京へ戻り10年後被爆の後遺症状態で休学
- ・昭和40年 4年遅れで大学卒業後一就職
車載無線機、コンピューターのシステム開発、
コンピューターの研究開発・製品企画・営業を経験
- ・平成11年1月定年退職。塾講師、埼玉県庁行政監察員

日本被団協がノーベル平和賞を受賞

2024年12月10日、全国組織である日本被団協（日本原水爆被害者協議会）は、ノルウェー・ノーベル委員会から「2024年・ノーベル平和賞」を受賞しました。

受賞理由は、「広島・長崎の被爆者による草の根運動である日本被団協が、核兵器のない世界の実現に向けた努力、特に核兵器が二度と使われてはならない理由を身をもって立証してきた功績」によるもの。

（ノルウェー・ノーベル委員会ヨルゲン・ヴァトネ・ドネス会長のスピーチより）

1－1. 戦時中の社会情勢

【第二次世界大戦】（広島へ疎開前の東京生活）

- ・昭和16年12月8日 日本が米国領真珠湾攻撃
- ・戦争開始当初は平和な生活→食料品の配給制度
甘いお菓子は次第になくなる
- ・B29爆撃機による空襲が始まる（昼間→夜間）
灯火管制 軍歌、子供は戦争ごっこ
防空頭巾、鉄カブト、国民服、もんぺ、ゲートル
- ・上陸に備えて武道（柔道・剣道・空手）の練習

1－3. 戦時中の社会情勢

- ・防空壕、防火用水、消火訓練
- ・プロパガンダ
 - ◇敗けているのにラジオでは→勝った、勝った
 - ◇軍歌で士気をあおる
 - ◇「日本は負けそう」と言っ
- ・被爆前夜、食べ物は茶碗一杯の野菜の雑炊に
ご飯粒が小さじ1杯分が底に沈んでいる状態
→空腹、栄養失調

1－2. 戦時中の社会情勢

- ・昭和20年4月
国民学校1年生（小学校）→入学翌日学校閉鎖
中学以上は学徒動員
【軍国主義】→軍による独裁体制の様相
- ・国家総動員、従わないと非国民・国賊呼ばわり、
- ・憲兵→これが怖い 赤紙→出征兵士
- ・産めよ増やせよ、貴金属を→軍隊へ供出
- ・1945年3月10日東京大空襲→広島へ疎開（4月）
- ・家族はバラバラ
→長兄は東京、姉は新潟（学童疎開）、他は広島

地球が、核も戦争もない
平和で愛と喜びに満ちた
世界となりますように
願って止みません



2-1. 被爆当時 (1/2)

- ・8月6日 空は晴れて暑い朝
- ・早朝、次兄は学徒動員で宮島（厳島）へ
- ・姉は警戒警報解除（古田アナ）になり国民学校へ
- ・当時、両親と私の3人が自宅で1階
- ★突如、青白い光の雨が家の中の天井から夕立の雨のように降ってきた。「ザ〜っ」という音。
（爆心地から1 kmにおける実態）
- ・庭の岩に当たって跳ね返っている→気を失う

2-3. 現場から逃げる

- ・外へ出る。空は：晴れ→曇り（きのこ雲の下
- ・3メートル先まで燃えてきていた。
- ・母は頭蓋骨を4センチ位割って脛と手に裂傷
- ・私も顔（右半面血）、頭、手足に釘
- ・家の間から遠くの景色が見えるようになり、コンクリートの建物が遠くにボツンと見える

2-5. 被爆した人の群れ（お泉邸内）

- ・顔が真っ黒でスイカくらいに膨らんだ人たちが手を前にして（子供は私だけ）
- ・「水う、みずう」とうめきながらやってきて、
- ・水を求めて川の洲に転がり落ちてそのまま流される。
- ・死体が川全体に。
- ・夜は全滅の防空壕から梅干し。翌朝、門の方へ

近隣の様子

- ・隣家では、娘は柱に挟まれ赤ん坊は既に火の中。火が燃えてきて二人とも・・・。
→ 母親が手を合わせる
- ・反対側の家では父親が防火用水の水を。
母親と小学校3年のカヨ子ちゃんは火の下
- ・20軒くらい家が並んでいて、家から這い出せたのは我が家のみ

2-2. 被爆当時 (2/2)

- ・頭が動かない、「母ちゃん」「母ちゃん」と泣き叫ぶ（1階がつぶれた→後で知る）
- ・バチャ、バチャ（水をかける音）
- ・パチパチ（火が燃える音）
- ・日（→火）が見えるよ、暑いよ（熱いよ）
- ・父が「空手」で壁に穴をあけ私と母を救出（猫は頭が出れば体も出られる）

2-4. 一時避難

- ・お泉邸（浅野内匠頭別邸、現在の縮景園）の中の一突き当りに川の淵に芝生があって、両親と私、隣のおばさん。
- ・そこは護岸工事で2 mあまり川面より高くなっていて、黒い雨がボツボツと短時間（ボツンボツンと黒いシミ）。
- ・身体が浮き上がり芝生に傷の手でつかまる
- ・竜巻が起こり、松林の松が根がついたまま巻き上げられ 近くまで落下してくる。

2-6. 一晩明かして翌朝

- ・お泉邸の門の前に行くと兵隊が野球のボールくらいの丸いおむすびを配っている。
- ・門の壁際に男の人がいて背中が真っ赤にやけどしていたが、奥さんが灰を塗っている（光に当たった人はケロイド）。
- ・焼け跡で金づち（後で次兄が持ち帰り）。
- ・門から出ると街路樹は消し炭
- ・両親と私→担架→練兵場 途中で死体
- ・市電の運転は女子学生：黒い骸骨

家の前の松原

- ・家の前は松原（松の林）で太い松が根こそぎ全部水平に倒れて。
- ・松原の向こうの浅野内匠頭（たくみのかみ）の別邸（お泉邸、現在の縮景園）へ逃げ込む

被爆した我が家の状況

- ・1階はつぶれ、2階は原型をとどめたまま傾いている。2階の床は地面から1メートル位の高さ。
- ・母は裂傷を負っているにもかかわらず、つぶれた1階を足場に2階の窓付近に登り、父の上着と水筒を持ち出した。この上着に「買い出し」のための大金が入っていた。それが後に、生活費となり東京へ帰るための汽車賃になった。

2-9. 被爆2か月後 東京へ

- ・傷が何か月も治らない
- ・東京での検査 白血球？が2万
- ・食糧事情：食料不足 米は手に入らず、渋谷で「家畜の飼料で作ったパン」（10銭）、庭にサツマイモ
- ・昭和22年2月 私が小学2年の時父は死去
- ・昭和23年ストレプトマイシン誕生 昭和26年私が結核
- ・被爆10年後 高校1年の時再度、発病
休学→復学→手術。傷口がふさがらず。

2-7. 親戚の家へ

- ・歩いて己斐（こい）駅→電車で古江の親戚へ
- ・顔の右半面は血のり 川の水面に映す
- ・学校の教室が医療現場（赤チンのみ）
- ・母はイチジクを隣の農家から買って いたが、食欲がなくなり髪も抜け始めた（放射能）
→死のサイン→イチジクを気力で少しずつ食べて→回復！！

2-10 戦後の学校

- ・昭和20年12月編入、怖くて母の手を：PTSD
- ・1教室に2クラス（“すし詰め”状態）、アメリカさん
- ・給食（サケの缶詰・・・アメリカから）
- ・二部授業（午前または午後）4年生まで
- ・昭和21年2年1学期 新聞紙大を折り畳み教科書
- ・教科書は前学年からのもの、戦記物は黒塗り
- ・昭和23年4年ローマ字教科書、5年国語の教科書、6年で国語、算数、理科、音楽の4科目の教科書

3-1. 核保有国の核弾道弾数



②原爆を絶対に使わせてはならない

- ・広島・長崎を最後に絶対に人類の上に繰り返すな
- ・核兵器廃絶は大賛成。現状は困難。段階的に
- ・そこで、戦争はさせず。現戦争は早期に停止へ。
- ・長期化すれば核戦争を引き起こす。
- ・まずは、保有する核兵器を使わせないように誘導。
- ・やがて核兵器保有が負担になり、自ずと廃絶へ

①-1 戦争は絶対にしてはならない

- ・戦争になったら文化、経済、命も良心も破壊消失
- ・最後は最も強力な武器＝核の使用
→ 人類（生物）絶滅
- ・戦争の姿 ウクライナ、偽情報
→ 外交努力、話し合い
→ お互い理解し、思いやり、助合い、許し、譲歩
敵は敵ではなく愛する隣人である
→ 専制主義の国から留学生を受け入れ
民主主義を実際に経験

③継承のお願い（語り継ぐ大切さ）

- ・東北大震災では高校生が語り部
「ここから海岸寄りに家を作るな」の石碑に誰も気づかなかった。
- ・「天災は忘れた頃にやってくる」
（寺田寅彦：明治10年～昭和10年、物理学者）
- ・原爆も語り継がねば忘れ去られ、
「核」のボタンを押されてしまう可能性（タリク・アブドゥル）

語り部の三松保則さんはパワーポイントを駆使して、多くの画像と共にお話してくださいました。
三松さんご自身が選択されたその一部を掲載させていただきました。

「おばあちゃんの若い頃に」(特別企画オープニング曲)

作詞：いなひでのぶ 作曲：ムッチー

ちょうど100歳迎えた朝に おばあちゃんはこの世を去った
十分生きたというかのように ただ安らかに眠りについた
けどおばあちゃんは生きていたころに 時々夜中にうなされていた
火が落ちてくる 火が落ちてくる おびえながらつぶやいてた
おばあちゃんが若い頃、日本は戦争をしてたんだ

おばあちゃんが十九の春に おばあちゃんの街は焼けた
地獄のような猛火の中を おばあちゃんは夢中で逃げた
だからおばあちゃんの背中には 大きなやけどの跡がある
もうこりごりだ もうこりごりだ 悲しそうにつぶやいてた
おばあちゃんが若い頃 日本は戦争をしてたんだ
何のための戦争なのか 誰のための戦争なのか

おばあちゃんの兄さんたちは 南の島の戦地に行った
何とか死なずに帰ってきたのは 一番下の兄さん一人
けどその兄さんの体には 二本の足がついてなかった
なんてむごいんだ なんてむごいんだ 悔し涙でつぶやいてた
おばあちゃんが若い頃 日本は戦争をしてたんだ

おばあちゃんが二十歳の夏に あの戦争がやっと終わった
食べ物もなく住む家もなく おばあちゃんは必死で生きた
だからおばあちゃんはいつだって ご飯を絶対残さない
ああおいしいな ああおいしいな うれしそうにつぶやいてた
おばあちゃんが若い頃 日本は戦争をしてたんだ
何のための戦争なのか 誰のための戦争なのか

高校生になった僕に おばあちゃんは話してくれた
つらく悲しい戦争のこと ほんとは忘れたいはずなのに
きとおばあちゃんは願っただろう 僕らにわかってもらうことを
戦争だけは 戦争だけは 何があってもやってはならぬ
おばあちゃんが若い頃
日本は戦争をしてたんだ
何のための戦争なのか
誰のための戦争なのか
それは昔のことだったのか
本当におわったことなのだろうか
本当におわったことなのだろうか



「被爆アオギリ2世」の植樹と平和教育

広島平和記念公園にある2本の被爆アオギリ。もともこのアオギリは、当時の通信病院にありました。病院で働いていた沼田鈴子さんは被爆後、左足を失い、婚約者は戦死。生きる気力を失っていましたが、芽吹いた被爆アオギリに勇気をもらいました。1973年に平和記念公園に移植、沼田さんは多くの人にアオギリを通して原爆の悲惨さを訴え続けました。このことを後世に継承するため、このアオギリの種を発芽させ、育て、苗木を「被爆アオギリ二世」と名付けて植樹する運動が全国各地や海外でも始まっています。

2001年から、坂戸鶴ヶ島地区原爆絵画展実行委員会の有志で「被爆アオギリ」2世の植樹を始めました。約10年で、市内全中学校への植樹完了。2016年からは、市の事業として受け継がれ、市長も加盟する「平和首長会議」から苗木を入手し、1年に1校ずつ小学校に植樹、今年秋には全小中学校への植樹が完了する予定です。

昨年の8月6日、4年ぶりに全小中学校を回り、アオギリの生育状況などを調査しました。対応してくださった教職員のみなさんと広島・長崎のこと、平和教育の在り方などについて対話することもできました。教育委員会に報告したところ雑草の除去や看板の補強など、迅速に対応してくれました。「被爆アオギリ2世」のさらなる平和教育への活用を要請しました。

第31回ヒロシマ市民の描いた原爆絵画展でも会場に写真等を展示しました。

被爆者のお話を聴く機会の設定が、年々困難になっています。各学校の被爆アオギリ2世の下で「語り部」の方にお話をしていただくような取り組みはできないのでしょうか。そのほか、アオギリのさらなる公共施設への植樹と植樹に合わせたイベントの開催、映画の上映、平和コンサート、それらと原爆絵画展とのコラボ、戦争体験記（坂戸では第4集）の編集など、原爆被害、戦争被害の実相を一人でも多くの人、特に若い世代に伝えていくことが、今こそ、求められていると思います。 **子どもたちに、核も戦争もない未来を！**

アンケート集計結果(2025.8.18~24)

168人の方にご協力いただきました。()内は昨年の回答数です。

◆年齢 未就学児 1(1) 小学生 28(3) 中学生 27(0) 16歳~17歳 7(0)
18歳~20歳代 1(3) 30歳代 2(2) 40歳代 23(5) 50歳代 13(13)
60歳代 16(10) 70歳代 33(14) 80歳以上 18(9)

◆市町村 坂戸市 123(34) 鶴ヶ島市 12(11) 東松山市 4(3) 鳩山町 3(0)
青梅市、所沢市、川越市、さいたま市、滑川町、日高市、東村山市 各2
狭山市、鴻巣市、毛呂山町 各1

◆この絵画展を何でお知りになりましたか。

チラシ 43(19) (若宮中学校等のボランティア募集の通知を含む)
ポスター・看板 13(15) HP・FB 12(6)
通りすがり、ここに来て初めて知る 43(?)
家族・友人・知人の紹介 25(15) 地区の回覧板 3
広報・他団体のチラシ 6(5) 無回答 4 (2つ以上の回答あり)

◆この絵画展をご覧になったのは、何回目ですか。

はじめて 142(31) 2回 11(4) 3回 4(6)
4~9回 6(9) 10回以上 3(7) 無回答 1

◆絵画展のご感想は？

とてもよかった 119(37) よかった 39(17) ふつう 6(2)
あまりよくなかった 0(0) よくなかった 0(0)

◆自由にご意見、ご感想をお書きください。

小学生

- ・原爆について知れた。アオギリについて初めて知った。
- ・せんそうの絵がこわかった。せんそうがこわかった。(7)
- ・戦争がおきると大変だからずっと平和な日本が続いてほしい。
- ・平和は普通のことじゃないのが分かった。
- ・これを通してあらためて、原爆のひがいにあった人の気持ちをすることがで良かったです。

- ・昔のことをよく知れて勉強になりました。
- ・原爆が落ちたのを現した絵が上手だった。
- ・すごいことを知った。
- ・リアルですごいことを知った。
- ・80年前には、広島と長崎に原爆が1発ずつ落とされていて、戦争と原爆のこわさを改めて実感しました。絵をみて、戦争は絶対にしてはいけないとおもいました。
- ・原爆について知れた。アオギリについて初めて知った。
- ・戦争がおきると大変だからずっと平和な日本が続いてほしい。
- ・平和は普通のことじゃないのが分かった。
- ・途中で死にたいと思う人が出てきそうなほど、すごかった。
- ・改めて原爆の苦しさやざんこくさを知れた。
- ・これを通してあらためて、原爆のひがいにあった人の気持ちを知ることができて良かったです。
- ・すごくいろいろあり、ビックリ！
- ・とてもよかった。
- ・いろいろすごいえがあり、びっくり。

中学生

- ・原爆でたくさんの人がどのような事が起きたか知りました。人が苦しんでいる絵や、亡くなった人の絵を見ていろんな思いが浮かびました。原爆などで人が苦しんでなくなることがなくなるようになってほしいです。
- ・初めてこのような絵を見て、当時のことを知り、知らなかったことがこの絵を見て知ることができました。この絵を見て、絶対に戦争はしてはいけないと思いました。
- ・80年前には罪のない人たちが原爆で一瞬にして死んでしまって悲しいと思いました。
- ・絵画ごとに少し間隔が開いていてみやすかったです。被爆した方が描いた絵などを見て、核兵器を2度と使ってはいけないと思いました。
- ・原爆の影響を、絵を通して感じる事ができた。戦争によるこのような被害を起こさないためにも、人民の声が届く政治をしていくべきだと思う。
- ・とてもいい体験になりました。そして今回の経験でいろいろ考えさせられました。
- ・今回はありがとうございました。このボランティアを通してみんなに原爆の怖さを知ってほしいと思いました。
- ・戦争は絶対にしてはいけないと再確認できました。
- ・その場面も見たことがなかったので絵などを見て、ひどいやけどだったり、して悲しかったです。昔はすごく大変だったことがわかりました。
- ・私は80年前、生きていなくて、なんとなく知っている程度で原爆のことを知っているけど、絵を見て、改めて、とても苦しいものなんだと思いました。
- ・勉強できました。(7)
- ・リアルですごいことを知った。
- ・もう原爆を体験された方が少なくなっている中、こんな風に当時被害を受けた方々に話を聞いて

て、形に残していくのはすごく良い活動だなと思いました。

- ・充実した時間を過ごすことができ、よかったです。実際は絵や言葉よりつらいと考えると、胸が痛いんです。だから戦争の悲惨さをこれからも伝えられるようにしていきたいです。とても貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。
- ・戦争については、学校の授業やドラマなどでしか学ぶことができなかったけれど、この機会を通じて、戦争の悲惨さを知ることができました。また、戦後の水爆について知ることができたのでよかったです。この度は貴重な体験をありがとうございました。
- ・見やすい展示の仕方になっていてよかったです。
- ・原爆のことを知れた。授業ではないことも知れた。
- ・原爆のあたえた広島、長崎への悲しい出来事について、絵画を通して少しでも知ることができました。
- ・当時の悲しい出来事を知れた。

16 歳～17 歳

- ・今回原爆のことについて詳しく知れる良い機会だと思いました。絵から感じとれる歴史の風景や思いが気づけて良かったです。ありがとうございました。
- ・思っていたよりも展示品が多くて良かった。
- ・アオギリ 2 世の活動についての展示が印象に残った。自然の力を通して子どもたちに伝える活動に感銘を受けた。残り 1 校ということでもっとこの展示を通じて小中学生に知ってほしい。
- ・戦争の怖さや恐ろしさを知った。
- ・協力して準備ができたので良かったです。
- ・今まで原爆については、教科書からの絵や画、傷しか見ていませんでした。今回見てみて、被爆した子どもの写真や、皮膚がはがれている絵が特に衝撃的で。より、当時の様子を知ることができたと感じました。

18 歳～20 歳代

30 歳代

- ・息子の「平和と戦争」について学習のために伺いました。当時の悲惨な状況が絵から伝わってきました。戦争や核のない世界になってくれることを願うばかりです。
- ・地域ごとの訪れやすいところでこのような企画をやっていただくのは、戦争を知らない世代（私も含めて）にとってとても重要なことだと感じました。

40 歳代

- ・これほどの被害をしてもいまだに、核を持とうかという議論があることが悲しいです。子供に伝えていきたいです。
- ・被爆アオギリ事業をあまり知らず恥ずかしい限りです。原爆被害の認識を新たにしてしまった。自分

もアオギリの写真に写っていて驚きました。

- ・自分たちの幸せに暮らせているが、実際に 80 年前の日本ではこのようなことがあったことは、決して忘れてはいけないこととを感じる。未来の子たちに伝えてほしい。
- ・最近原爆のこと、テレビなどでよく見ます。心がつらいです。
- ・たった 80 年前の出来事とは思えない。二度と繰り返してはいけないと思った。
- ・戦争の様子をよくえがかれていてすごい。
- ・戦争のむごさ、犠牲になった無実の人、夢忘れてはいけないことだと思います。
- ・悲惨であるが現実のものとして、今後もうけつがらなければならないと感じました。
- ・戦争の悲惨さを伝えるため、今後も続けてほしい。
- ・丸木も行きましたが、市民目線の原爆忌の様子が見れた。恐ろしさが自分に近い目線の絵を見て、より現実的にイメージできた。当時の人がご年配で、残っている人が減ってきたが語り継がなければならないと感じた。
- ・語り継ぐことの重要性、学生さんたちの関わりが頼もしく感じました。
- ・絵から伝わるインパクトがすごくて、わかっているけど原爆の恐ろしさが伝わってきました。体験者の方から直にお話が伺えて貴重な機会をありがとうございました。
- ・原爆というのはたしかにいけないことだった。しかし、日本も中国や朝鮮で同じくらいの人を殺害している。原爆だけにフォーカスするのではなく、なぜこういうことが起こってしまうのか、そのことをもっと深く考えていくべきなのではないかと思う。それが亡くなった人からのメッセージだと思う。
- ・初めて被爆者の方のお話を伺いました。音楽とのイベントの組み合わせも、とてもメッセージ性がありよかったと思います。
- ・小3 の子どもが戦争に興味を示したタイミングで来られました。家族で日本の忘れてはならない歴史について知り、学ぶきっかけとなり貴重な時間を得られました。1 階の展示の絵の中の文字が何と書いてあるのか、絵の左右どちらかに掲示していただけると読みやすく混雑緩和になるかと思いました。来年もまた三松さんの講話を聴きに来たいと思いました。(終わりのころに来たので)。ありがとうございました。
- ・三松さんのお話、胸が苦しくなる思いで聴きました。被爆者として生きていく覚悟、伝えていく覚悟、私も見習わなくてはと思います。思い出し、語ることは、思っている以上に疲弊する作業と、私は思っています。その活動を続けてくださることに感謝の気持ちでいっぱいです。そして、どうぞお体大切にいただき絵本を作成してもらいたいと思います。日本もアメリカもどちらも被害者であり、加害者でもあると私は思っています。お互いがお互いの気持ちを認め、世界のみんなが友達になることを願ってやみません。貴重な機会をありがとうございました。

50 歳代

- ・わかりやすくシンプルに展示されており見学しやすかったです。夏休み中のお子さんと保護者さんには是非見て知っておいてもらいたいです。
- ・当時の様子を伝える方法として、とても有意義だと思いました。運営は大変だと思いますが、足を運ぶ人が多くなるように願います。
- ・恐怖です。

- ・入西地域交流センターはオルモより多くの方に見ていただけるのでいいと思います。一方で展示点数が少なくなる心配も（展示スペースの関係）。
- ・自分の生まれる30年前に起きたこと。今になって思えば、たった30年前のことだと思った。テレビではこのような状況の描写を映像で流すのは難しいため、その状況を知ることができ、深く考えさせられた。

60 歳代

- ・こういう企画は毎年行ってください。(2)
- ・以前から開催を知っていましたが、なかなか都合つかず、主人同伴で初参加です。体験者を通じての貴重な証言、絵画、事実、悲惨さを届けていただきました。当時の戦争体験者が少なくなってくる中、次世代（親からの伝言や体験を）の私たちは後生の若者たち、子どもたちに伝えていく努力が大切です。参院選での右翼、戦争賛成、戦争怖いです。子どもたちの参加がうれしく、平和の大切さ。
- ・テレビ・ニュースを通じて、情報は得ていましたが、実物の絵を前にして、どんな思いでこの絵を描いたのだろうかと思うと、胸が痛みました。忘れることのできない記憶、その方たちの思いをこれからも、伝えていかなくてはと改めて思いました。
- ・平和のための取り組みとても大切なことだと思います。
- ・伝え続けていることの大切さを改めて感じています。原爆の被害、今も続く被害者の皆さんの思いをきちんと受け止める日本であってほしい。核兵器を持てば、なんて発言を断じて許してはいけません。
- ・展示の説明文が簡潔でわかりやすく、初めて見るものには良かったです。知っているようで知らなかったこと、知っていても何度も見て、聞いて知っていくことが大切だと思うようになりました。今までは戦争は怖いものとして、避けていたけれども、世界の状況を見ると、とおい世界のことでないし、そうなった理由は長い歴史の中にあったのだと感じて、歴史を学んでいかなければいけないと思うこの頃です。高齢に足を踏み込んでいますが、学ぶことは今からでも遅くないと、これからスタートです。
- ・平和のための取り組みとても大切なことだと思います。

70 歳代

- ・現実にその場にいた人たちの絵を見て、本当に地獄のような場面の中にいたことを実感しました。二度と経験したくないし経験させたくない。核は使ってはならない。
- ・2度とこんなことが起こらないように、政治家の皆さん努力してください。
- ・絶対に戦争はだめ勝者も敗者ありません。最近「墨子」の本を読みました。非戦。
- ・2度と原爆のない世界へ。
- ・「最近の日本、新しい戦前」と言っている人がいます。「戦」はむごいです！！
- ・胸が痛んだ。
- ・涙が出ました。泣けました。
- ・忘れてはいけないこと。
- ・活動していただいている方々に感謝いたします。
- ・大切なお話ありがとうございました。戦争、核戦争は絶対にやってはいけないと誓いました。昭和天

皇と同年は徴兵されないなんてはじめて聞いた。ひどい差別。

- ・こんなことが2度とあってはならない。小さな会場でも胸に迫るものがあります。よくやってくれました。
- ・原爆の恐ろしさ、罪のない人々の死。未だに世界では戦争が行われていて、一部の自己都合での主犯格の人をうらみます。1日も早く平和な世界を！！ぜったい原爆はやめてください。作品がもう少しあるとよかったと思います。
- ・この事実少しでも向き合えたらと思って観に来ました。目にした事実は文章等と同等以上に心に残ると感じました。
- ・リアルなお話が聞けてとても良かったです。
- ・私の父は爆心地2キロで被爆しました。そして私は被爆2世です。悲惨な絵を観て、救助にあたっている兵士は父なのではないかと思ってしまい、涙が出ました。核廃止、世界平和を祈ります。
- ・丸木美術館で見た絵と同様にとても心が痛くなった。特に死んだ我が子をおんぶして供養する場所を探している絵は印象に残った。
- ・戦後生まれの私には、悲惨な過去があったことは聞いてはいても今回の絵画のように目から入ってくるもののすごさ、この先絶対にあってはならない状況が良く伝わりました。戦争をしてまで手に入れたいものって何なのでしょうね。命が一番大切なはずなのに（情けない）。
- ・戦争は二度とやってはいけない
- ・このようなありさまを観るのはつらい。でもこのような運動を継続して行って全世界に戦争の原爆の悲惨さを知らせることが大切なことだと思う。

80 歳以上

- ・戦争のむごさ、人間同士の殺し合いの恐ろしさを改めて感じました。私の幼いころ実写を見た時のショックを思い出して改めて、戦争反対の気持ちを強くしました。
- ・ピースミュージアムなどで、展示してもっと多くの人に見てもらいたい作品です。
- ・広島に行ったときに公園に立ち寄りました。今年見ていますが大変だったことがよく分かります。2度と原爆は落としてはならない。
- ・終戦当時は10歳でした。当時の状況は未だに頭の中に鮮明に残っています。
- ・命・大切・戦争ぜったいダメ
- ・ピースミュージアムなどで、展示してもっと多くの人に見てもらいたい作品です。
- ・いろいろありがとうございました。何一つお手伝いができず申し訳なく思います。
- ・原爆は絶対に二度と使ってはいけないもの！！
- ・これだけの絵を収録されました。参考になりました。



絵画展実行委員から

青木 明兄

素晴らしかったことが多くあります。私は毛呂山町の原爆絵画展を運営しています。坂戸に参加してみて思うことは、学ぶことが多かったことです。会議では、受け持つ企画を提案してくる方や音楽的なイベントまで提案されていました。

今年初めての取り組みとして一週間の開催、子どもの参加型体験教室、ボランティアとしての中学生と高校生としての受け入れ。参加する人も多く、反原爆・平和運動を広げる効果があったと思います。中心になって運営する方々が息切れしないで、続けられることを隣町から願っています。

青木 亘

世界のあちこちで戦火が絶えない。80年前のことがなかったかのように日本も軍備を拡大している。なんとかしなくてはいつも思う。そんなひとつが原爆絵画展。若い人が頑張ってくれたこともあり、今年は来場者が多かった。子どもたちもたくさん来てくれた。中学・高校・大学生がボランティアで手伝ってくれた。こんな風に若い人たちが少しでも戦争や核兵器をなくすことに関り続けてもらえたらと改めて思う。

伊賀 知子

今年は、オルモから入西地域交流センターに会場を移して、一週間という期間開催し、少しでも若い世代の方々に来場してもらえたらという気持ちでいました。戦後80年という年に、戦争について少しでも地域のみなさまに関心を持ってもらえたことが、本当に嬉しかったです。ありがとうございました。

市河 武

1週間のボランティアを終え、新たに実行委員となりました。たくさんの実行委員の方々にお世話になりましたが、皆さんとても暖かくて、この人たちの力になりたいと思えました。

来年以降もよりたくさんの方に来ていただけるように頑張ります。

上田 典男

今年の絵画展は大きく二つの変化がありました。一つは会場の変更です。北坂戸のオルモから入西の地域交流センターに代わりしました。もう一つは2日間の日程を1週間の長期日程に変えたことです。どうなるかなという思いもあったのですが、スタートしてみますと絵画展に来ていただいた方々の総数は800余名という、今までにない人数になりました。たくさんの方々に来ていただいたことで、本当によかったという思いを持ちました。続けることの大切さも再認識しました。

会場づくりや絵画、模型等の展示、会場の警備にはベテランのみなさんと共にボランティアで来てくれた学生さんたちが若い力を発揮して頑張ってくれました。

ノーベル平和賞に輝いた被団協の三松保則さんの講演も注目を集めました。

お子さん達のための昔の遊びを体験できるワークショップもありました。

第五福竜丸の模型展示を見て「死の灰が降るぞ」と言われた当時のこわさを思い出しました。ビキニ海域の今は安全なのでしょうか？

私事なのですが、絵画展の時期に体調を崩してしまいほとんど仕事ができませんでした。武井ご夫妻、小川市議、実行委員のみなさん、本当にご苦労さまでした。お手伝いくださったベテランのみなさん、若いボランティアのみなさん、ありがとうございました。

榎並 智

第五福竜丸の模型と原爆の図パネル「第十部 署名」とが図らずも並んで展示されていた。ビキニ環礁での被曝をきっかけに「杉並アピール」が掲げられ署名活動が伝播し翌年には「原水爆禁止世界大会」開催へと運動が広がった。だから 8.6、8.9 とともに 1954.3.1 も決して忘れてはいけない。江東区夢の島の「第五福竜丸展示館」へ行けば生々しくその事実を学ぶことができる。子ども向けにはアーサー・ビナードの絵本『ここが家だ ペン・シャーンの第五福竜丸』という絵本が身近である。大人は7月に刊行された小説、伊与原新著『翠雨の人』を手にとりたい。

小川 未奈子

今回、実行委員メンバーとして2回目の参加でした。前回は企画などにあまり関われなかったのですが、今回はチラシデザインの作成から特別企画のワー

クショップについて、他のメンバーとも相談をして順調に準備を進めることが出来ました。

そして、今回は会場を入西地域交流センターに変更した事もあり、多くの方にご来場いただいた事は、本当に嬉しく実りの多い原爆絵画展になったと思います。何より、小中学生や高校生に原爆の悲惨さを目の当たりにし、様々な思いをめぐらせてもらえたのではないかな、と思います。ボランティアを募集した事も、中学生・高校生の良い経験となり（私たちにとっても）、実行委員会メンバーとの新たな繋がりが出来ました。

そして、平和の大切さを少しでも感じてもらえたらと願っています。特別企画のおもちゃ作りワークショップ、そして三松保則さんの講演会、どちらもとても素晴らしかったです。三松さんの平和へのメッセージを、会場で参加したみなさんと共に私も受け止め、これからの平和への取り組みに活かして行きたいと思います。

反省点は、司会をした私の写真や、実行委員会メンバーの写真をもっと撮って（撮ってもらって）記録に残せば良かったと思いました。過去の記録はとても貴重な物だと、先輩方のアルバムを見て感じていたので、来年からの原爆絵画展に活かしたいと思います。

武井 真澄

私の少し前の世代が始めた原爆絵画展は今年31回目になりました。「被爆80周年」の年です。同時にそれは「戦後80周年」。日本が武器をもって海外の国と戦わなかった奇跡的な80年です。

日本国憲法、特に世界に誇れる9条のある平和憲法を持つ日本。今まで頑張って来られたのはこの憲法あってこそです。

この平和憲法の下で戦後100年を迎えたい（どんなに9条が歪んだ解釈をされても根本は「戦争の放棄」ですから）。そして坂戸・鶴ヶ島地区の第51回原爆絵画展に出会えたらうれしいなあ。その時に、今年来てくれたボランティア中高生は30代後半、私は（生きていれば）90代。日本は核兵器禁止条約にもきちんと署名してすべての国が核兵器も持たず、平和で豊かな楽しい生活を送れている20年後。私は平和にぼけてうろうろして、当時の中学生が担う絵画展を頼もしく見守るような、そんな生活を送っていたいなあ。



原爆絵画展実行委員会
ホームページQRコード

